

9 盲導犬の透析室への受入れ

上田透析クリニック

小宮山静子 小宮山真澄 橋詰公乃 永井とよ子 山田和彦

【はじめに】

透析患者の42%は糖尿病であり¹⁾、視力障害を合併して失明される患者もみられ、QOLの低下がみられる。盲導犬は視力障害者の活動範囲をひろげ、QOLの向上に大きく寄与している。現在、日本では965頭の盲導犬が活躍しているが²⁾、そのうち14頭が透析患者と生活を共にしている。当院でも、最近、盲導犬と生活を始めた患者がおり、その盲導犬の透析室への受け入れの経緯や問題点などを報告する。

【経緯】

1) 患者

飼い主の患者は39歳の女性、糖尿病からの腎不全で透析歴7年。全盲であるが、旅行が好きで、海外へもよく出かけている。

本年5月から盲導犬と生活されるとのことで、透析中の犬の待機について相談をうけた。本人の希望はベッドサイドでの待機であった。

2) スタッフの話し合い

それ件について、スタッフで話し合いをおこなった。スタッフ14名のうち、犬が嫌いとか怖いという者が2名いたが、患者の意向に沿う方向で検討することにした。犬からの感染や清潔の問題、犬アレルギーの患者がいるか、犬の嫌いな患者への対応を

どうするかなどが課題にあがった。

3) インターネットでの検索

まずはインターネットのウェブで検索し、盲導犬の受け入れは病院や施設によってさまざまな対応があることや、犬を透析室で待機させている患者のブログを読んで、そこにいたるまでかなり大変であったことや、全患者の理解と協力が必要であることなどを知った³⁾。

4) 患者へのアンケート

そこで、まず患者全員に盲導犬についてのアンケートを行なった。ほとんどの患者は盲導犬のことを知っており、70%の患者は透析室への受け入れがOKであったが、残る患者は透析室外の施設内での待機であり、その主な理由は「透析室内が不潔になるから」であった。犬アレルギーの患者はいなかった。

5) 施設見学

次に、すでに盲導犬を透析室内に受け入れている千葉県内の施設の見学をおこなった。清潔面では問題ないこと、他の患者とのトラブルは無いが、他の患の不安や不満などの受け皿をはっきりさせることが必要なことなどを知った。

それらを踏まえて、飼い主の患者、盲導犬の訓練士、スタッフでの話し合いをおこない、訓練士よりレクチャーを受けた。

飼い主の患者には、犬はガウンを着て、足を拭いてから入室することや、患者が透析後に具合が悪くなったときの対応などを決めた。

小宮山静子 上田透析クリニック

〒386-0033 上田市御所674 TEL0263-27-3006

6) 全患者への説明

患者全員へ文書と口頭で、盲導犬の透析室への受け入れの経緯、感染、清潔などは問題ないことなどをお知らせして理解と協力をお願いし、犬のアレルギーがある患者がいるかをチェックし、犬が怖いや嫌いな患者のベッドは遠くへ移動してもらうこととした。また、犬を無視する、呼びかけない、手を出さないなどのお願いもおこなった。

7) 現状と問題点

現在、犬は透析中はベッドサイドでおとなしく寝ているが、施設へ入ってからベッドサイドまでと、帰りのベッドサイドから施設を出るまでの間は、「待て」の姿勢がしっかりできないことがあるなどの、躰の問題がみられる。これは、患者が、まだ盲導犬との生活に不慣れであることや、犬が若いためと思われる。また、患者自身もその間の行動に戸惑いがみられ、スタッフの援助を要することもあるが、今後、慣れてくるとと思われる。

【考案】

身体障害者補助犬法は平成14年に制定、施行されて公共施設への盲導犬の受け入れが定められ、平成15年には不特定多数が利用する民間施設でも、著しい損害を受ける恐れのある場合を除いて、盲導犬の同伴を拒んではならないとされた。盲導犬協会は、「補助犬が感染の原因となった例はないので、医療施設でも手術室、集中治療室、調理室などを除き盲導犬の同伴を認めるように」との声明を出している⁴⁾。しかし、その対応は医療機関によってまちまちであり、他の患者への迷惑、衛生上の問題、汚れ、犬の衛生管理、感染症やアレルギーなどの問題、犬の臭いや行動の問題などの不安や心配のため、ほとんどの医療機関が盲導犬の透析室への受け入れをおこなっていないようである⁵⁾。

犬の受け入れについては、施設管理者やスタッフ、

他の患者が犬を好きか嫌いかということが一番の決め手になっていると思われ、犬の好きな者にとってはその導入はまったく問題ではないが、犬の嫌いな者にとっては抵抗感がある。そのあたりを、どうクリアーするか、が重要である。

また、旅行先で透析を受けるとき、その透析施設が盲導犬を受け入れるかどうかは、患者にとって大きな問題であり、旅行したいができないというのが現状のようである。当院でも、当院の患者が盲導犬と生活するというので、初めてその導入を検討した次第であるが、全国的にみても、盲導犬の扱いをどうするかを検討をした医療機関は18%にとどまっている。どの施設においても盲導犬への対応について、どのようにするかは、あらかじめ十分検討して態度を明らかにしておくべきと思われる。

【まとめ】

当院での盲導犬の受け入れについて報告した。盲導犬の透析室での待機については、犬の嫌いな患者への十分な配慮と、クレームの受け皿をはっきりさせること、また、飼い主は犬の躰をしっかり行うことが重要と思われる。

【文献】

- 1) 腎不全治療マニュアル 2007 日本透析医学会
- 2) 日本盲導犬協会からの私信
- 3) インターネット ウェブ「盲導犬透析施設」第28号より引用
- 4) インターネット ウェブ「盲導犬」日本盲導犬協会より引用
- 5) インターネット ウェブ「盲導犬透析施設」全日本盲導犬使用者の会より引用